

光が光るのではなく、電子との反応で光る。

2020.12.29

前に、光とは、電子のない原子核だと書いた(●論文「光とは、電子のない原子核」2020.8.1、<http://eizo09.com/127j.htm>)。要するに、恒星で、燃料である原子の電子が燃えて、電子のなくなった原子核が、遠くに放たれるということである。そして、その電子のない原子核は、あらたに電子を見つけて、また、普通の原子に戻るという考え方だ。

光は、広がっていくが、極論すると、電子のあるところに行くとなる。また、物質である以上、重力に引かれることもあるだろう。しかし、電子のない原子核は、電子という、重力に引かれるものを持たないから、遠くに行くだろう。この電子のない原子核は、「光」と言う。ということは、通常光っているはずである。しかし、本当に、電子のない原子核が光っているのだろうか。

確かに、細かく見れば、原子核が燃えているわけだから、光っているだろう。私は、電子のない原子核が光っているのではなく、電気が光っていると思う。つまり、またあたらしくくつつく電子と反応する場合に光るような気がする。つまり、光は、受け手が見るもので、送り手、それを感じられないと。その受け手に電子がなければ、光は見えないだろうということだ。電子のない条件で、観察してみればわかるだろう。

エイゾウ

[eizo@eizo09.com](mailto:eizo@eizo09.com)